
バカとテストと直死の魔眼

ぱっつあん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと直死の魔眼

【Nコード】

N0109W

【作者名】

ぱつつぁん

【あらすじ】

二年間の昏睡状態から目覚めた黒神式は、あるものと引き換えに万物の死を視る、‘直死の魔眼’を手に入れた。式の瞳に映る日常はおバカな仲間との平和な日常。個性豊かな仲間と共に、殺人姫の学園コメディー、ここに開幕！！

ブログ（前書き）

この小説は不定期更新です。
なるべく早く投稿しますので、よろしく願います。
では、ごきげん。

プロローグ

季節は春。

校舎へと続く坂道の両脇には桜が咲き誇っている。

これは新入生を迎えるための桜だが、残念なことに今この時間帯に校舎へと向かっているのは新入生ではなく、今年で二年生になるクロカミシキ黒神式だった。

学生鞆を背にまわし、気だるそうに桜の咲き誇る道を歩く。

黒曜石を思わせるような黒髪は肩の辺りで無造作に切り揃えられているものの、それが一番合っているようにさえ思える。

顔立ちが女性が見れば男性に、男性が見れば女性に見えるのではないかと思うほどに中性的で、何処と無く近寄りがたい雰囲気を感じている。

中性的な顔立ちをしているとはいえ、どちらかと言えば女性の柔らかさを感じさせる。

当たり前だ。式は女性なのだから。

「黒神、遅刻だぞ」

玄関の前でドスの利いた野太い声がシキの耳に入る。

声のした方に視線を傾けてみれば、そこには浅黒い肌をし、髪を短く切り揃えたいかにもスポーツマンと言わんばかりの男が立っていた。

「……西村か。おはようございます」

「西村か、ではない。せめて先生をつける」

「……西村先生」

式の目の前にいたのは生活指導の西村教諭。トリアスロンが趣味の肉体派であることから、生徒達からは『鉄人』と呼ばれている。生活指導の西村教諭に目をつけられれば色々と厄介ではあるが、既に目をつけられている式にとっては大した問題にはならない。

「それより他にいうことはないのか？」

「ああ……？ 今日も肌が黒いな」

「お前といい吉井といい、遅刻の謝罪よりも俺の肌の色の方が重要なのか？ ……まあいい、受けとれ」

西村教諭は式の言葉に溜め息をつきながらも、茶色の封筒を箱から取り出して差し出してくる。

さして興味もなさそうに式はそれを受けとると、のり付けされた封筒を無造作に破り、中から一枚の紙を取り出す。

二つ折りにされた紙を開けばそこには大きく『F』と一文字が書いてあるだけ。

予想通りだったのか、興味がないのか。はたまたそのどちらだったのかは定かではないが、式は何事もなかったようにそれをしまう。

「あまり関心があるように見えんな？」

「……別に。不満があったら殺り合って設備を奪えばいい。それだけの話だ」

「その意欲がせめて少しでも勉強に向くことを祈っている」
「……………」

西村教諭の言葉に答えることもなく、無言で歩みを進める。

黒神式。文月学園の問題児の中でも最も危険な思考の持ち主。欲しいものがあれば奪えばいい、気に入らない奴がいれば黙らせればいい。そんな思考の持ち主だ。

最も、彼女が恐れられる理由はそれだけではないが、それらを総

合して《殺人姫》と呼ばれている。

そのためか、式を恐れる者は少なくない。

(……面倒くせえな)

西村教諭の脇を通り抜けて下駄箱に辿り着いた式は溜め息を漏らしながら、そんなことを思う。

黒神式という人物は基本的に集団行動を好まない。学園などといった集団生活に、どことなく面倒な感情を覚える。

靴を履き替え、一年の時はほとんど足を踏み入れたことのない三回に向かう。

そこでまず目に入ったのは通常の教室の五倍はあるのではないかと思うほどに大きい教室だった。

興味本意で中を覗けばそこには黒板の代わりに壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイ。

生徒一人一人にはノートパソコン・個人エアコン・冷蔵庫・リクライニングシートなどといった普通に授業を受けるには過剰なほどの設備と広さがあった。

(なるほどな。こいつがAクラスか……)

二年生のクラスを編成する振り分け試験において、上位の成績を収めた生徒が在籍するクラス。それがAクラスだ。

クラス代表 その中でも誰よりも優秀な成績を収めた生徒。簡単にいうならば学年で最も優秀な成績を収めた生徒が、このAクラスのクラス代表となる。

しかし、AクラスどころかFクラスである式にとっては関係のない話だ。

Aクラスに向けていた視線を廊下の先に戻すと再び歩き出す。

そして『Fクラス』と書かれたプレートのある教室の前で、式は

立ち止まる。

Aクラスと比べると外見から既にかなりの違いだが、Fクラスとは学年でも最低の成績を誇るクラス。

仕方がないといえば仕方がない。

教室の扉に手をかけ、ゆっくりと扉を開く。

「あつ、式。おはよう」

「黒神か。うっす」

扉を開けて最初に目に入ったのは、教壇にて言い争っていた痕跡のある二人だった。

そのどちらも見覚えのある顔であり、式の知り合いでもある。

「……吉井に坂本か。相変わらず仲がいいな」

「「どこが!!」」

「……そういうとこだ」

式の言葉にまるでタイミングを計ったように息があったツツコミを見せる二人に式は呆れたように溜め息を漏らす。

吉井明久よしいあきひさに坂本雄二さかもとゆうじ。この二人とは一年の時から付き合いで、

明久は観察処分者の称号を与えられている。

とりあえず二人の漫才に付き合う気のない式は、改めて教室を見渡す。

やはりFクラスの設備は最低で、机の代わりに卓袱台が用意され、椅子がなく皆床に座っている。

これほどまでに設備に差があれば不満も募るだろう。

(不満なら勝ち取ればいい話だけどな……)

物騒な考えを抱きながらも式は空いていた窓際の席に腰を降ろし、

外を見上げる。

それから程なくしてFクラスの担任と思われる人物がやってきた。寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを貧相な体に着た、いかにも冴えない風体の人物だ。

失礼といえは失礼だが、Fクラスにピッタリな感じがする。

教師は教壇の前に立つと自己紹介を始める。

「2年Fクラス担任の……福原真ふくはらしんです。よろしくお願いします」

教師 福原真 は薄汚れた黒板に名前を書こうとしたが、すぐにやめてこちらに向き直る。

どうやらチヨークすらもがろくに用意されていないらしい。

「えー皆さんに卓袱台と座布団は支給されてますね。不備があったら言ってください」

一年のうちからFクラスの設備について話を聞いてはいたもの、実際に目の当たりにすると言葉がでない。

卓袱台と座布団で授業を受けなければならぬなど、なんて斬新な設備だろう。

「せんせー、俺の座布団綿が入ってないんですけど」

ふとクラスメイトの誰かが福原教諭に設備の不備を申し出る。

「我慢してください」

「卓袱台の足が折れてます」

「木工用ボンドが支給されているのでそれを使って自分で直してください」

「窓が割れてて隙間風が寒いんですけど」

「ビニール袋とセロハンテープを申請しておきますので後で直してください。」

そのほかにも色々と不備があがるのだが、全て『我慢してください』か『後で直してください』だけ。

改めてFクラスの設備の悪さと待遇の悪さを思い知った一瞬だった。

「では、必要なものがあつたら極力自分で用意してください。では廊下側から自己紹介を」

福原教諭の言葉を受けて、廊下側の一番前に座っていた生徒が立ち上がった。

式は外の風景から立ち上がった生徒に視線を向けると、知り合いだったということに気づく。

「木下秀吉きのしたひでよしじゃ、演劇部に所属しておる。今年一年よろしく頼むぞ」

独自の言葉遣いと小柄な体。肩にかかる程度の髪をゆったりと縛った出で立ち。

一年間見慣れた式でさえぱつと見、いや、じっくり見たとしても女性に間違えてしまう顔立ちのせいで、同性に告白されることは珍しくない。

本人は女の子に間違えられることを良しとしていないが、見た目から性別を判断するとなれば女の子にしか見えないから仕方がない。

「……土屋康太どまけいこうた」

続いて立ちあがったのはやや暗い雰囲気男子生徒。

しかしこの文月学園内に置いては最大のシェアを誇るムツツリ商

会を運営するやり手である。

「島田美波しまだ みなみです。海外育ちで日本語での会話は出来るけど読み書きは苦手です。あ、英語も苦手です。育ちはドイツだったので……趣味は」

勝ち気な表情を浮かべて髪をポニーテールに纏めている少女

島田美波　は言葉を一旦切ると明久の方へと視線を向ける。

その行動に明久は嫌な予感を覚え、表情を歪ませる。

「吉井明久を殴る事です」

その発言に明久は僅かにビクついた。

当たり前だ。そんなピンポイントかつ恐ろしい趣味を持つ少女がクラスメイトとなるとこの反応は普通だ。

そもそも人を殴ることを趣味にしている時点で、バイオレンスの何者でもない。

笑顔でこちらに手を振ってくる美波だが、その笑顔は明久にとっては悪魔の笑みにしか見えていない。

そして順番は進んで明久の番。立ち上がり、自己紹介を始める。

「吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さい。」

『『『『『ダーラーリーーン!!』』』』』

刹那、野太い声の合唱がFクラス中に響いた。

もちろん狙ったこととはいえ、あまりにも大きな反応に明久は顔をひきつらせ、窓際のシキも顔をしかめていた。

「失礼、忘れてください」

自己紹介を終えて席に座ったのはいいが、明久は吐き気が止まらない。
まさか本当に呼ばれるとは思っていなかったために、狙ったとはいえない辛いものがある。

ただ、これを見る限りではFクラスの団結力は他のクラスに劣らないものだろう。

そして自己紹介が進んでいき、式の番となる。

「……黒神式だ」

立ち上がり発したのはたったそれだけ。それだけを言って式は席につく。

だが今までのように騒がしい雰囲気ではなく、どことなく冷たさを感じさせる雰囲気教室に漂う。

文月学園でも断トツに問題児である《殺人姫》が同じクラスともなれば、何かあるのではないかと心配になってしまふのだろう。

式は式でこういった雰囲気に慣れているのか、特に気にした様子もなく再び窓の外へと視線を向ける。

不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせた女子生徒が現れた。

「あ、あの、遅れて、すみま、せん」

『えっ？』

誰からともなく、教室全体が豆鉄砲を喰らった鳩のようになった。それは仕方がないことだろう。今のこの状況を考えたら当然の反応だ。

「丁度良いですね。みなさんに自己紹介して貰っているところなの

で、姫路さん、あなたもお願ひします」

「あ、はい！ えと、姫路瑞希です。よろしくお願ひします……」

小柄な身体を縮こまらせ、恥ずかしげに自己紹介する瑞希。

白い肌と柔らかかそうな長い髪は、いつそ小動物的な保護欲をかき立てる。

「はいっ！ 質問良いですか？」

「あ、はい。どうぞ」

いきなりの質問に、少し驚いているようだ。

瑞希はその小さな体をさらに小さくしながら、発せられた質問に
応答する。

「なんでここにいますか？」

失礼極まりない質問だ。しかし、クラスの大半が感じている疑問
でもあるだろう。

何せこの可憐な少女は入学後に行われたテストで、学年二位を記
録しており、その後も必ず上位一桁以内に名前が残るという才女だ
からだ。

だれもが彼女はAクラスに違いないと確信しているに違いない。

「えっと、その、ですね……。振り分け試験の最中に高熱を出して
しまいました……」

瑞希のその言葉で全員が納得する。文月学園では、試験途中での
退席は、かならず0点扱いとなる。

そのせいで彼女はFクラスとなってしまうのだ。

実力主義のこの学園ではいかに力があるうとも、本番に力を発揮

できなければならないと同じ判断を下される。

瑞希の応答に変な言い訳を始めるFクラスの一部がいるが、この際無視する。

「で、では、一年間よろしくお願いしますっ！」

ピンクの髪が跳ねるほどの勢いでお辞儀すると、パタパタと恥ずかしそうに明久と雄二の間の、空いている卓袱台に着いた。

それを見届けた式は卓袱台に突っ伏す。

これ以上聞くことがないと判断したのだろう、目を閉じて意識を睡魔に託すこととした。

プロローグ（後書き）

この小説にはあまり魔術師というのはいりません。
ただ、魔眼関係が多く出るかもしれせん。
では、感想待ってますッ！！

第一問（前書き）

【第一問】

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。合金の例……ジユラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（ すごく強い ）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

黒神式の答え

『……興味ないね』

教師のコメント

少しは興味を持ってください。

第一問

「シキ、ちよつといいかな」

「ん……なんだよ吉井。オレに何か用か？」

式が卓袱台に突っ伏してから数分と経たぬ前に、明久が式に声をかけてきた。

若干眠たげにしているものの、たかが数分で熟睡出来るはずもなくすぐに明久の言葉に反応して顔をあげる。

顔をあげるといつものふざけた表情などではなく、真剣な顔付きをした明久と、同じように明久に呼ばれたらしきFクラスの代表、坂本雄二がいた。

「ここじゃ話にくいから、廊下でいいかな」

「……別に構わねえけど」

式は気だるそうに立ち上がり、真っ直ぐに廊下に出る。

本来ならHR中というだけあって、廊下には人影かはない。

それを確認した明久は安心して話が出来るとばかりに口を開く。

「この教室についてなんだけど……」

「Fクラスか。想像以上に酷いもんだな」

「……まあ、Aクラスに比べたら酷い有り様だ」

一方はチヨークすらないひび割れた黒板で、もう一方は値段も分らないプラズマディスプレイ。ここまでの設備の差に不満の意を唱えない者はいないはずだ。

ただここに一人だけ例外がいるものの、そこはあえてスルーする。

もちろん式のことではあるが、それ以外の皆は不満を抱いている。

「そこで僕からの提案。せつかく二年生になったんだし『試召戦争』をやってみない？」

「戦争、だと？」

「うん。しかもAクラス相手に」

「へえ。吉井にしてはやる気じゃん」

明久の提案に今まで気だるそうな表情だけをしていた式の表情が、楽しげで愉快そうな表情となる。

しかしそんな賛成思考の式に対して、雄二は怪訝そうな表情をしている。目を細くし、明久を警戒しているようにも見える。

それも仕方のないことだ。明久は全く勉強に興味がないために、今更勉強用の設備の為に戦争を起こすとは思えない。

さらにいえば明久がこの学校を選んだ理由は『試験校だからその学費の安さ』だからだ。

どう考えても明久がAクラスに『試召戦争』を挑むのはおかしい。そこでふと式が先程までのことを思い出す。

(……………そう言えばさっき吉井は姫路の方を見てたな)

瑞希は振り分け試験で体調が悪かったばかりに、Fクラスとなった。

今は体調が治ったとはいえ、今のこの窓がなくすきま風が吹いてくるFクラスでは再び体調を崩しかねない。

しかもこんな設備では瑞希の勉強に支障を来しかねない。

以上の事柄から式は一つの答えを弾き出す。

「……………姫路の為か？」

「ど、どうしてそれを!？」

「なるほど。そういうことか」

式の言葉でようやく明久が戦争を申し込む理由を理解することが出来た。警戒の色が消えて、代わりに楽しげな笑みが浮かぶ。

「まあ、お前に言われるまでもなく俺自身、Aクラス相手に試召戦争をやるうと思っていたところだ」

「えっ？ どうして？ 雄二だって全然勉強なんかしてないよね？」

明久の言い分も最もだ。雄二も明久と同じように勉強なんかしていない。だからこそ、Fクラスなんていう最低のクラスに身を置いているわけだ。

だからこそ今度は逆に明久が疑問に思った。

もちろんそれは雄二がAクラスに試召戦争を挑む理由が分からない式も同じではあるが、試召戦争を挑むこと自体には大いに賛成しているため異論は唱えない。

「世の中、学力が全てじゃないって、そんな証明をしてみたくてな」「そいつは面白そうだな。オレも協力するぜ？」

「ああ。Aクラスに勝つ作戦にはお前にも協力してもらおう。ところで黒神、なんでお前はFクラスにいるんだ？」

「それってどういうこと？」

雄二の失礼極まりないセリフに、明久が疑問を浮かべる。

だが雄二は答えない。その瞳は鷹のように鋭い。

明久に何があつたかを理解することは出来ないが、雄二は何か思い当たることがあるのだろう。

そして式は、特に表情を変えないまま言う。

「……別に。お前には関係ない」

明らかな拒絶。

そのことに踏み入ることを許さないとばかりの鋭い眼光は、かつて『悪鬼羅刹』と呼ばれた男を射抜く。

何かただならぬ理由があるのかもしれない。

だが、それは知られたくないことだという表れ。

これ以上聞いても何も聞き出せないと判断した雄二は一息つくくと、廊下の先を見つめた。

「ならいい。先生が戻ってきた。入るぞ」

「あ、うん」

雄二のいう通り廊下の先には先程出ていったと思われる 式は寝ていて知らない 福原教諭が戻ってくるのが見えた。

二人は雄二に促されるまま教室に入り、席に戻る。

坂本雄二は考えていた。

かつて雄二は神童と呼ばれていた。そして、それと並び神童と呼ばれていた少女がいた。

名字は知らない。名前は『シキ』ということだけは知っていた。

黒曜石のような髪に、人を寄せ付けぬ雰囲気。それが周りからの『シキ』の評価だった。

そして、この文月学園に入学して彼女を見つけたとき、雄二は鳥肌が立った。

まさに噂通り、いや、それ以上の異常さに。

(なんでだ……)

しかしそこには神童と呼ばれていた『シキ』の姿はない。いったい何があったのか。今の雄二には、知る術はない。

再び残りの自己紹介が始まる。

それからは特に何かが起こるといっわけではなく、淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、キミが自己紹介の最後の一人ですよ
「了解」

福原教諭に言われて雄二がゆっくりとした動作で立ち上がる。

教壇に歩み寄るその姿にはいつものふざけた雰囲気は見られず、クラスの代表としての貫禄が見られる。

そんなクラス代表の姿にクラス全体の視線が向けられる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ。さて……みんなにひとつ聞きたい」

上手い間の取り方。視線は向けていたものの、耳までは傾けていなかったFクラスの生徒達が聞き耳を立てる。

皆の様子を確認した雄二は教室の各所を見渡していく。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

雄二の言葉と視線に釣られてFクラスの面々は同じように教室の設備を見渡していく。

そして、雄二はゆっくりと口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……不満はないか？」

『『『大アリじゃあっ！！！！』』』』

今までの不満を晴らすようにFクラスの叫びが教室を揺るがした。当然だ。ここまでの設備の差があるのに不満がないわけがない。さらにいえばそれを焚き付けた雄二の演説もかなりのものと言える。

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二の言葉で堰を切ったかのように、あちらこちらから不満の聲があがり始めた。

いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ。

そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ。

あまりにも差が大きすぎる。

誰しもが胸のうちに秘めていたFクラスと他のクラスとの設備の差について。

それらをまとめ、引き継ぐように雄二は口を開いた。

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが……」

そこで言葉を一旦区切ると、雄二は笑みを浮かべる。

それはとても自信に満ち溢れており、野性的な笑みだった。

「 Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

だがその瞬間にFクラスの思考が一瞬だけ停止する。

Aクラスへの宣戦布告。それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか見えなかった。

勝てるわけがない。これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。姫路さんがいたら何もいらぬ。

先程の不満を漏らす声同様に、あちらこちらから声上がる。

確かに誰が見てもAクラスとFクラスの戦力差は明らかだった。

(……これが普通の反応だろうな)

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されている。

一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことが出来るのだ。

そして科学とオカルトと偶然から生まれた『試験召喚システム』。教師立ち会いの下、テストの点数に応じた強さの『召喚獣』を呼び出し、戦わせることが可能となる。

『試験召喚戦争』はこれを利用したクラス単位の戦争となる。故に、クラスごとの生徒数は一定である以上、個々のテストの結果の合計がそのままクラスの総戦力となる。

AクラスとFクラスでは生徒一人一人ですら、その差は三倍以上もあり、文字通り桁が違うのだ。

どうあがいても勝つことなど不可能としか思えない。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

しかし雄二はそれを否定して見せた。圧倒的な戦力の差をどのように埋めるのか……。

教室中からは否定的な声上がる。どう考えても勝てる見込みのない戦争だ。やるだけ無駄だとさえ思える。

やって設備が落とされるくらいなら、勝率のない戦争になど乗りたくない。ほぼ半数の生徒がそういった感情を抱いているはずだ。

「信じられないのも無理はないはずだ。だが、このクラスには試召戦争で勝つことの出来る要素が揃っている」

雄二の言葉でさらに教室がざわめく。先程から雄二の言葉で教室がざわめくことが多い。

それだけ異常なイレギュラーことが多いのだ。

今まで話を聞くだけだった式の目がスツと細くなり、品定めをするように雄二に向けられる。

それに気づいた雄二は見てろ、と言わんばかりの表情を浮かべる。

「まずは……おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「ひゃわっ」

雄二に呼ばれた少年 土屋康太 は必死に顔と手を横に振って否定する。だがその頬にはくつきりと畳の跡が残っており、康太のやっていたことを物語っている。

覗かれた瑞希もさすがにスカートを押さえながら遠ざかる。

康太は顔についた畳の跡をさするように隠しながら壇上に向かった。

「土屋康太。こいつがかの有名な、ムッリーニ寡黙なる性識者だ」

「……………！！（ブンブン）」

最早クラスがざわめくことなど普通になってきている。

土屋康太という名前こそ有名ではないものの、ムッツリー二の名前は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を。女子生徒には軽蔑を。

周りだけが納得していく中ただ一人、姫路瑞希だけは頭に疑問符を浮かべていた。

「姫路は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「ふえっ！ わ、私がですかっ？」

突然話をふられて、あわてる瑞希。しかし、試召戦争になるとしたら確かに彼女ほど頼りになる存在はいないだろう。

本来ならばAクラスでも一、二を争うような実力者がここにいる。それだけでFクラスの士気は高まっていく。

「ああ。うちの主戦力だ。期待している」

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『彼女がいれば、ほかに何もいららないな』

「木下秀吉だっている」

「む？ ワシか？」

『おお……………！』

『確かアイツ、木下優子の……………』

木下秀吉。学力ではあまり名前は聞かないものの、Aクラスの木下優子の双子の弟やら、演劇部のことで有名だったりする。

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良なんかだったのか』

『なんだよ、Aクラスレベルが二人もいるんじゃないか、このクラス』

いつの間にかクラスにはいけそうだ、やれそうだという雰囲気が満ちていた。

そう。気が付けばクラスの士気は雄二の演説にて確実に上がってきている。

上手くやればこのまま士気を上げることも出来る。

そして、ここぞとばかりに雄二はある人物の名前を出す。

「《殺人姫》、黒神式もいる」

教室内が一瞬だけ静まり返る。

まさかここで文月学園内でも屈指の問題児の名前が出るとは思わなかったのだろう。

だがよくよく考えてみれば、いくら問題児とはいえ今は同じクラスの意味方であることには代わりない。

『そうだよ。あの黒神もいるんだ』

『確かにあいつならAクラス相手でもなんとか出来そうだ』

『これなら勝てるかも知れない』

一瞬だけ静まり返ったものの、戦力の大きさに気づいたクラスの士気はさらに向上する。

「それに、吉井明久だっている」

しかし、たった一言で一気に士気が下がった。
あそこまで上がったいた士気がここまで一気に下がるとなると、
むしろ感心せざるを得ない。

「ちよつと雄二ー！！ どうして僕の名前がそこででてくるのさ！
全くそんな必要なかったよね、今！？」

『……誰だ？ 吉井明久って』
『いや、知らん』

『なんとなく聞き覚えがあるような？』 いや、気のせいか』
「せつかく、盛り上がっていたのに、なんでもり下げようなこ
とをするのさー！」

もし名前を聞いたことがあったとしても、きっとそれはろくな話
ではないと明久は思う。

知らないならば教えてこれ以上上げる必要もないはずだ。

「知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは 《観察
処分者》だ」

『……それって、バカの代名詞じゃあ……』

「ち、違うよっ！ ちよつとお茶目な十六歳につけられる愛称で…
…」

「そつだ。バカの代名詞だ」

「肯定するなバカ雄二ー！！」

相変わらずの漫才に、式は溜め息を漏らす。

《観察処分者》というのは具体的にいえば教師の雑用係のことだ。
力仕事などといった類いの雑用を、特例としてもに触れるよう
になった試験召喚獣でこなすというものだ。

本来、召喚獣が触れるのは他の召喚獣だけなのだが、明久の召喚

獣は特別製なのだ。

しかしそれだけではない。《観察処分者》の召喚獣の負担の何割かは本人にフィールドバックするため、召喚獣が感じた疲労や痛みを感じる事となる。

『《観察処分者》ってことは試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ?』

『っーことは召喚できない奴が一人いるってことだろ?』

「気にすることは無い。どうせ使えない雑魚だからな」

「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよな?」

止めを指すところじゃないよね?」

「とにかく、俺達は力の証明としてまずはDクラスを征服してみようと思う」

いかに戦力が揃っているとはいえ、さすがに最初からAクラスを潰しにかかるうということはない。

小手調べという意味も含めて、まずは戦力的にFクラスと近い

Aクラスと比べて Dクラスを制服するということだ。

Dクラスと試召戦争を行い、勝つことで士気を高めようということでもある。

ここでDクラスを征服し、成績が全てでないということを知らしめる。それも目的の一部だ。

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう?」

『当たり前だ!』

「ならば全員筆を執れ! 出陣の準備だ!」

『おお っ!』

「俺達に必要なのは卓袱台ではない!! Aクラスのシステムデスクだ!」

『うおお っ!』

「お、おー……」

霧囀気に飲まれて瑞希までも小さく拳を作って挙げていた。だが、その霧囀気に流されない者もいる。

《殺人姫》黒神式。勢いだけでは勝てるとは思っていない。

式は心の刃を解き放ち、不敵に笑みを浮かべる。

それは本当に愉しげで、残虐な笑みだった。

彼女の瞳は、蒼色に染まり上がっている。

第一問（後書き）

オリジナル魔眼募集しています。

今は『歪曲の魔眼』と『魅惑の魔眼』の二つがあります。

オリジナルストーリーは魔眼を中心に物語を展開していきます。

また、魔眼をもつオリキャラも募集中です。

では、感想待ってますッ！！

第二問（前書き）

問

以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
 - 『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』
- 姫路瑞希の答え
- 『(1) 弘法も筆の誤り』
 - 『(2) 泣きつ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『猿も木から落ちる』、(2)なら『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘法の川流れ』

教師のコメント

シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きつ面蹴つたり』

教師のコメント

君は鬼ですか。

黒神式の答え

- 『(1) 殺人鬼も刺し間違える』

『(2)泣きつ面を刺す』

教師のコメント

貴女の人生に何があったのでしょうか？ 先生はとても心配です。

第二問

「明久、お前にはDクラスへの宣戦布告の使者をやってもらおう。大役だ。任せるぞ」

「でも、下位勢力の使者って、たいがいヒドい目にあうよね？」

宣戦布告を行うということは、された相手をした相手が倒せるといふ自信の元に行う行為だ。

この文月学園では関係の上下がクラスの振り分けではっきりとしている以上、下位の者からの宣戦布告は気に食わない。

それが故に手を出してしまうのだろう。宣戦布告に行け、ということはやられてこいというのと同義だ。

「大丈夫だ。奴らがお前に危害を加えることはない。騙されたと思っ
て行ってこい」

「……本当に？」

「もちろんだ。俺を信じろ」

「じゃあオレが行くか」

その言葉を雄二が言い切ったと同時にそんな声が聞こえ、教室の扉を閉める音が聞こえた。

今まで話していた雄二だけでなく、明久も他の皆も押し黙る。

明久がDクラスに宣戦布告に向かったのでなければ、いったい誰が宣戦布告に行ったというのだろう。

ようやく事態に頭が追い付いてきた雄二がいう。

「待て！？ 今行ったのは誰だ！？」

「……………黒神式」

「何い！？ ……色々な意味で不味いな」

康太の言葉に最初こそ驚いていた雄二であったが、出ていったのが式だと分かる何故か焦りが小さくなる。

それは何故か？

女子相手なら手を出さないと思っっているから？ 誰かが助けにいけないと思っっているから？

違う。Dクラスに向かったのが《殺人姫》クロカミシキだったからだ。とはいえ手を打たないわけにはいかない。

「クロカミに手を出すようなバカはいないと思うが、一応フォローを頼む、ムツツリーニ」

「……………分かった」

「あと明久は黒神を迎えに行つてこい」

「分かったよ」

雄二の言葉に返事をしたあと、明久と康太はFクラスから飛び出す。

飛び出したところで明久ははめられそうになっていたんだな、と気付くのであった。

一方、Dクラスに宣戦布告に向かった式はDクラスの教室の前をいた。

扉を開け放ち、とりあえず一番近くにいた女子生徒に声をかける。

「なあ、ちょっといいか？」

「はい、何かし……………ら……………？」

最初こそ他のクラスの生徒に話し掛けられた、ということでも訝しんだものの、話し掛けてきた相手を見て戦慄する。

ある意味《観察処分者》よりも問題児であり《殺人姫》が話し掛けてきたのだ。

恐怖を覚えるのも無理はない。

式の悪い噂についてはことを絶たない。

《殺人姫》などと呼ばれているために人を殺したことがあるやら、気に食わない相手がいれば平気で殺す、などといった物騒なものだ。もちろんそれは根も葉もない噂ではあるが、火のないところに煙は立たないともいう。

どちらにしても文月学園No.1の問題児に話し掛けられた時点でこうなるのは仕方がないのだ。

「Dクラスの代表、呼んでもらえないか？」

「わ、分かったわ。平賀くん、他のクラスから会いに来てる人が…」

「他のクラスからって……ッ!？」

Dクラス代表の平賀も式の姿を見てやはり身の危険を覚える。

とにかく、平賀は式を刺激しないことを前提に話をするということとする。

「アンタが、Dクラス代表か？」

「い、いかにも。ぼくがDクラス代表の平賀だ」

「そうか。その反応だと言わなくても分かるだろうが、オレはFクラス……黒神式だ」

式はわざとDクラス全体に聞こえるような声で自らの名を名乗る。

自分の噂が良いものではないことを知っていて尚且つ、自分が恐れられていることを利用した行動だ。

《殺人姫》のいきなりの訪問にDクラスがざわめく。Dクラス代表の平賀は微妙に頭の処理が追いついていない。

「用件だけ言わせてもらおうぜ？ オレ達FクラスはアンタらDクラスに宣戦を布告する。開戦は今日の午後だ」

「宣戦布告？ 君たちFクラスがDクラスに？」

「そつだ。FクラスがDクラスにだ」

さすがにこれはふざけているとしか思われないうら。

DクラスとFクラスの戦力は圧倒的とまではいれないが、勝率はかなり低い。

しかも授業を受けて成績が上がってからの話ではなく、入学して早々の話だ。現在のクラスの振り分けが、そのまま戦力の差を表しているというわけだ。

もしも明久が宣戦布告に来ていたならば酷い目に逢うのは目に見えていただろう。だが相手が相手のために手が出せない。

「用件はそれだけだ。じゃあな、せいぜい オレに殺

されないように、気を付けな」

『『『『『ひつ……！？』』』』』』

式が去り際に見せた屈託のない、危険に満ちた笑み。

それを見たDクラスの何人かが小さく悲鳴を上げる。

そんな反応を鼻で笑い、式はDクラスを後にすることにした。

宣戦布告は成功した。雄二のいうとおり、ある意味危険のない宣戦布告だったが、式だからこそその安全だっただろう。

ふと、こちらに向かって走ってくる明久の姿が式の視界に入る。

「……何やってんだ、吉井。宣戦布告ならもう終わったぜ？」

「そつじゃないよ。何か酷いことされなかった？」

「お前も知ってるだろ？ オレに好き好んで危害を加えるような奴はいいよ」

「そうかもしれないけど式は女の子なんだよ？ もっと自分を大切にしないと」

「む……。オレを女扱いする奴なんて、お前くらいのもんだよ」

明久の発言に一瞬だけ面食らったような表情になったものの、すぐにいつもの気だるそうな表情に戻る。

明久はそんなことはないと言っているが、実際に式を女の子として認識している人間はこの文月学園に何人いるだろうか。

確かに見た目こそはクールな女の子に見えるが、その性格は男勝りの性格で尚且つ一人称が『オレ』。

何回もいうようだが文月学園一の問題児の肩書きまでである式を、女の子として見ようとする方が無理がある。

性格ゆえか、友達と呼べるような人物もいないし、唯一《殺人姫》の名前に何の隔たりもなく話し掛けてくれるのは明久と雄二、秀吉くらいのものだ。

「だけどさ……。一応オレを女として見てくれてるんだろ？ だか

ら……。ありがとう」

「へ？」

式の突然のお礼に今度は明久が面食らったような表情になる。

普段の彼女から考えればお礼を言うことなど先ず有り得ない。そもそもそんな状況にならないからだ。

だというのに突然のお礼。しかも恥ずかしげに若干頬を紅に染めながら、そっぽを向いている。

《殺人姫》以外の式のことを知っていたとしても、これは稀少^{レア}以外の何者でもない。

すると不意にカメラのシャッターを切る音が聞こえた。

音の発信源に顔を向けて見るとそこには……。

「ムツツリーニ？」

ムツツリーニにこと土屋康太が立っていた。

手に持つてあるカメラはぱっちりとしの方を向いており、先程の表情を写真に収められてしまったことを瞬時に理解した。

式としてはあんな表情を写真に収められたのは、まさに黒歴史でしかない。

「……土屋、悪いことは言わない。それをオレに寄越せ」

「……………断る！」

《殺人姫》相手に物怖じせずここまでキツパリ言い切ったのは、文月学園に入学してからはほとんど無かっただろう。

男としてかなり勇ましい光景だ。だが、今回ばかりはその勇ましさか仇となる。

口元を不敵に歪めた式は、制服のスカートを途中まで捲り、足に取り付けてあるホルダーからナイフを取り出して逆手に構える。

余談だが式がスカートを捲る際に康太がカメラを構えたのはいまでもない。

「なら 殺さなくっちゃな」

式は小さく呟いて土屋に向かって走り出す。

それからの行為を見た明久は後に語る。

式の嫌がることは絶対にタブーだよ、と。

「おい明久。無事に帰ってきたはいいが、ムツツリー二に何があった？」

宣戦布告に向かった式の手助けをするように向かわせ、帰ってきた明久に雄二は訊いた。

視線の先には体をピクピクと痙攣させて、カメラを破壊された康太の姿がある。

窓際の席にはぼんやりと空を見上げる式の姿があり、何が何だか分からない状況だった。

「雄二、聞かない方が身のためだよ」

「はあ？ …… まあいい。今からミーティングを行う。黒神、お前も来い」

雄二の指名に明久を含めた全員が驚く。

Dクラスに勝つ上でのミーティングを行うなら、確かに式をミーティングに誘う必要があるだろう。

知る者こそ少ないものの、式ほどこの試召戦争において有利な者はいない。恐らく瑞希などといったAクラス並の成績を誇るキーマンと並ぶキーマンに成り得る。

「……なんでオレがそんな面倒なことやらないといけないんだ？

……と言いたいところだが。いいぜ、行こうか」

立ち上がった式は、そのまま雄二の隣を歩き出す。

去年同じクラスだったものの、いい噂を聞かない美波や瑞希達は僅かな不安を覚える。

だが式のことを知ってる明久や秀吉は頼もしくさえ思える。

「大丈夫じゃ島田に姫路。式はお主らが思っているよりずっといい

奴じゃ」

「そうなの？」

「あまりいい噂は聞かないのですが……」

「そんなことないよ」

美波と瑞希の不安を拭えない発言に、明久が割って入る。

明久は知っているのだ。式の残酷さと優しさを。

だからこそ、式の友達だからこそ、二人に伝えておくようにする。

「式はね。友達思いなんだ。自分がよく思われてないのを知ってるから、みんなと距離を置いてるんだ」

そういった明久の表情は、珍しく悲しげに見える。

それを見た美波と瑞希は何も言えなくなり、秀吉は明久と同感だとばかりに頷いた。

一方、明久達がそんな会話をしている中、一足先に屋上に向かって歩いていった式と雄二。

一足先に、と言っても明久達とそれほど距離が離れているわけではなく、明久達が行っている会話は式と雄二にしつかり聞こえている。

普段から自分の良い評価を聞いてこなかった式からすれば、自分に対する明久の信頼は嬉しい。

しかしそれと同時に恥ずかしく思える。せめて言うなら自分のいない場所にしてもらいたい。

頬を紅に染めて、恥ずかしげにする式。

「なんだ？ ガラにもなく照れてんのか？」

「うるせえな。こういうのは……なんつーか、慣れてねえんだよ」

「慣れてないときたか。まっ、普段が普段だからな。……ところで、ムツツリー二に何をしたんだ？」

実のところ、雄二は土屋があそこまでボロボロになっていたのが気になっていた。

宣戦布告に行ったはずの式はともかく、サポートに行った明久までもが無傷で帰ってきたにも関わらず、康太だけがボロボロになって帰ってきた。

話を聞いてみれば式がやったそうだが、何をやったかまでは聞いていない。あの明久が聞くなというくらいだから相当なのだろう。

「なんだ、知りたいのか？」

「い、いや。やっぱり遠慮しておこう」

聞きたかったのだが、式の不敵な笑みに思わず聞くのを躊躇してしまった。

彼、坂本雄二は知っている。彼女、黒神式がこのような笑みを浮かべるときはろくなことがないと言ったことを。

雄二の答えにそりや残念だ、と答える式ではあるが目が笑っている。どうやら雄二の選択は間違いではなかったらしい。

そして屋上に通じる扉を開け、くぐると太陽の日差しが目に入る。雲一つない青空に吹き抜ける一陣の春風。そよ風の如く吹き抜ける春風は、先頭に立つ式のスカートをはためかせる。

日差しのせいで目を皆が目を細める中、ムツツリの名に恥じない康太は式のスカートの中身に（いつのまにか持ってきた）カメラを向ける。

「まだ 足りないのか？」

が、春風が見せたのは男の理想郷でなければ、彼が見たいものもない。

白い肌に煌めく、銀色のナイフ。

そして、先程明久と康太にだけ見せた《殺人姫》の笑み。
康太の顔から血の気が引くのが分かる。あんな思いはもうこりこりだ。

「……………！？（ブンブンブンブン）」

「そうか？ なら仕方ない」

首が千切れかねないほどに横に振って否定する康太を見て、式は
つまらなそうに言う。

春風にはためくスカートを一回だけ払うように直すと、そのまま
歩を進めた。

自分達が目を細めている間に何があったのだろうと思った面々だ
ったが、一番上から見下ろす形で立っていた雄二だけはしっかりと
今の現場を見ていた。

（さすが《殺人姫》だな。まさかムツツリーニを黙らせるとはな）

ムツツリーニ
寡黙なる性識者の名は伊達ではない。多少のリスクがあろうとも
飛び込んでいくことだろう。

しかし、康太は式が相手だと下手に出してしまう。いや、下手にし
かでれないのだ。

いったい何をしたのかが気になるところだが、自分の命が惜しい
のもまた事実。雄二は改めて追及しないこととする。

「黒神、開戦の時間は伝えてきたんだろうな？」

「当たり前だ。じゃなきゃ、オレが何のために行ったか分からない
だろ」

「じゃあ、先に昼ごはんだね」

「そうだ。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べるよ？」

「そう思うなら奢ってくれると嬉しいんだけど……………」

吉井明久ははっきり言ってしまうえば生活破綻者だ。

両親の都合で彼は一人暮らしをしており、毎日を親の仕送りで生活している。その仕送りは決して多いわけではなく、そこまで余裕があるというわけではない。

にも関わらずゲームや漫画といった趣味の類いに生活費は持つていかれているため、食費に当てるだけの仕送りはほとんどない。

「えっ？ 吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、一応食べてるよ？」

「……塩と水と砂糖は食べてるとはいわないよ。オレのでいいなら弁当ぐらい分けてやる」

「ほ、本当に！？ でもそれじゃ式の分が……」

「別に。オレ、昼はあんまり食べないんだ」

実際、式は一回の食事ですこまで量を食すわけではない。ダイエットをしているとかではなく、少食なだけだ。

……とはいえそこまで目を輝かせていた明久の言葉を断れるほどの優しさも腐ったわけじゃない。

久しぶりにまともな食事が出来ると明久が喜んでいると、不意に瑞希が口を開いた。

「……あの、良かったら私が、お弁当を作ってくださいませんか？」

「え？ ほ、本当にいいの？」

「はい。明日のお昼でよければ」

「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

瑞希の申し出に明久は喜んでいた。

普通の食事が出来るだけでなく、女の子 しかも美少女 の手作り弁当だ。嬉しくないはずがないだろう。

だが、それをよく思っていない人物が一人いる。

「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！ その、皆さんにも……」

「俺達にも？ いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

美波の棘のある言葉に気圧されたのか、明久だけでなく皆の作ってくる訂正する。

女の子　もう一度言うが美少女　の手作り弁当を断る理由などどこにもないので賛同し、男性陣は大いに喜ぶ。

作るのは自分だというのに、これだけの量を作るのにも嫌な顔をしていない。

「もちろん、その、黒神……さんにも」

「え……？ オレにも作ってくれるのか？」

フェンスに寄り掛かるように立って、試召戦争についてのミーティングになるのを待っていた式に瑞希はそう告げた。

いきなりのことで驚いていた式は、クールな彼女にしては珍しく変な声を出してしまっていた。

ただ、瑞希は少しだけ式に怯えているのか、話しかけづらそうにしている。

「はい。あの……迷惑じゃなかったら……ですけど」
「……………」

言葉が後ろにいくにつれて小さくなり、最後の方はほとんど聞き取れないほどに小さい声となっていた。

式もすぐに答えないせいで、瑞希の不安が大きくなっているのだろつ。

驚いていた表情の式は改めて表情を戻し、ふっと笑みを溢すと瑞希に言つ。

「その……ありがとな、姫路」

「……はい！」

式の言葉に瑞希は嬉しそうに答えた。

瑞希の中で式と言う人物は完全に畏怖の対象となっていた。それは明久や秀吉の話聞いても揺るぎはしなかった。

しかし、式のたった『ありがと』の一言で噂通りの人物でないことを悟った。だが彼女が嫌われていることには間違いない。

「話は済んだか？ 試召戦争の話に戻るぞ」

「そうじゃな。ところで気になっておつたのじゃが、どうしてDクラスなのじゃ？」

秀吉の疑問も最もだろつ。段階を踏んで試召戦争を行い、Aクラスと戦うというならば必然的にEクラスと。勝負に出るならAクラスと試召戦争を挑むところだ。

そもそもFクラスの目的はAクラスの設備を奪うことだ。

なのに雄二はそのどちらも選ぶわけではなく、Eクラスより一つ上のDクラスを試召戦争の相手に選んだ。

「簡単だよ。Eクラスが雑魚だからだ」

「黒神の言つ通りだ。Eクラス相手なら今の問題のない姫路がいれば、正面からやりあっても負けることはない」

式の言葉に便乗するように言葉を紡ぐ雄二はだが、と一回だけ言

葉を切ると一度皆を見渡す。

「Dクラスは難しい。それに初陣だからな。派手にやって士気を高める必要もあるし、Aクラス攻略の為に必要な要素だ」

「つまりこれは最初のステップってわけだね」

「ああ。いいかお前ら、ウチのクラスは最強だ。お前らが俺に協力してくれるなら　勝てる」

雄二の揺るぎない、信念の籠った言葉に皆が同意する。

二学年になってから一番最初の試召戦争。

FクラスとDクラスの戦争が　幕を開ける。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0109w/>

バカとテストと直死の魔眼

2011年10月12日16時49分発行